

日本百將傳一夕話

六

2329

日本百將傳一夕話卷之六

東都

目錄

○ 源賴政

○ 平重盛

○ 平教經

○ 源義仲

○ 源賴朝

以上五將目錄終

松亭金水謹撰

永田姓



源頼政

人皇十代高倉帝治養四年五月廿六日卒
今安政三辰迄 六百七十七年成

源頼政者頼光之裔也善射善

倭歌秀于士林治承之間欲滅

平氏遂相戰於宇治自殺 享年七十

頼政の馬小精くまゝ和方で善まると世人のよく知る処なり。頼政家集

とて今に行る。かくて頼政は位を奉て歴位階の満きと歎き一首の歌で終

む。のちのちさき乃一ありと六本の下にあて拾え世でつらう。津海で是と

情。二。泰して從二位叙まると。国史畧に云。推子四位。言相同也。と。治承二年

頼光 攝津守 正四位下

前住守鎮守 府將軍

頼国 右馬頭 下野判官從四位下美濃守

頼綱 多田左門尉

仲政 兵庫頭 從四位下

頼政 三位入道 兵庫頭

法名頼圓

仲綱 伊豆守 檢非違使

兼綱 源大夫判官

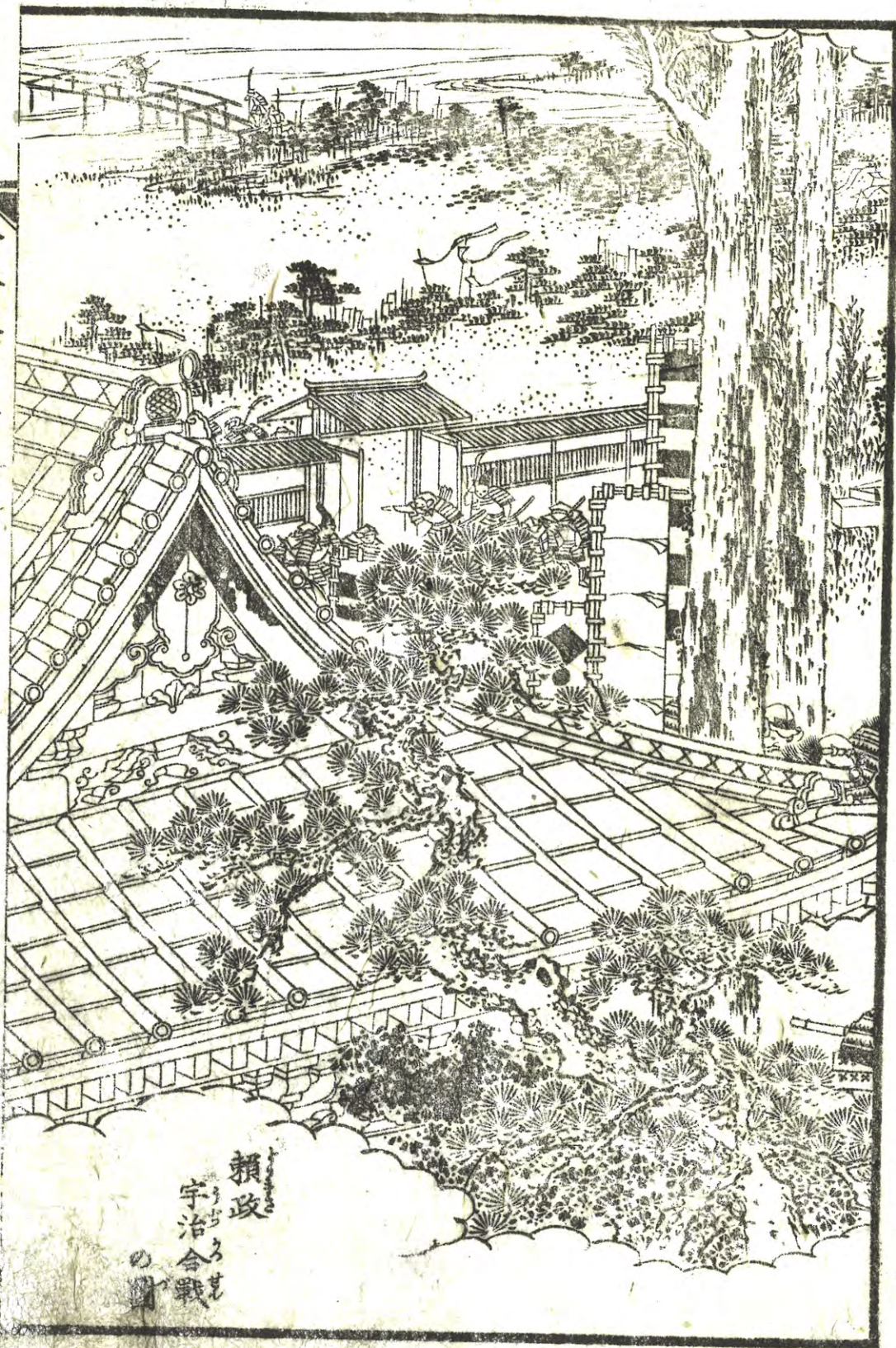
仲宗 六條藏人 實義親王子

頼兼 源藏人

源頼政の経

源二は頼政入道の家系前小の令。清和源氏の嫡流とて馬の道不達
一のひまの和分と善一のひまの世人の知所所て。実小優美の大將と謂べし。
いまど仕奉小坐一なる頃平治の信頼義朝の礼出まてその牙固より保家のね
なきに左典殿義朝小属一。一族弟従て引俱。戦場へ出られけきどもいまだ
平氏との合せとあさる。然る小上皇河内仁和寺へ主上二條の六波羅の業
へらせのひねと穿えなきに。かくて平氏へ對しる響んと今く朝敵あり。いさす
一と百餘誘あて六條河原小拒り。いまむのさせぬ折く。義朝の嫡男悪徳太
義平待賢門へ押寄る。左衛門佐重盛とあてふ切捲り。勝負とせんと挑み
あふ重盛が郎等共之を清門柔安と新藤左衛門家春が討死ある小園で幸
き命と傍りのひ。六波羅へ落られなきに。義平今ひ是迄とかの十六誘と引纏めて

選どきあて是と親て彼小控へ頼政の當家の一族小ありなす。この合戦小も
下さぐ思ふ小運と兩端に計る。その機と窺ふと覺えたり。乞者ども運令貳心
むらと盛と冷きすべしとの小秘とあて五平誘の兵ども忽馬の鼻と引返り。義平自
身陣頭小進と押是下い源二は頼政と陣とあて。若此方うち負る。伊勢平
氏小降りんと兩端小構へらる。佐佐木平家の諸士源氏小従ふとあてと保家
とて平氏小属せむ。當家のうち小瑾はる若是下より防さる。勝負の時の運小
名と下ひを安うと秘とて頼政進と出違ひ奇怪なる小冠若がは従ふはやく
む。下下ぐ又の義朝ある若のなる天魔に魅入る。元道不覺の信頼小當り。茶
も十番の若小對し。ちと響て朝敵の誘名と千載小送ひとそり岩の瑾との受け
とて義平大不効り。物あひをせそ付てこれとを二番と小突蕩る。さるる渡
當家若先小進と。史れたるひて幾ひ。若平が猛威いふも史とかの十六誘の兵軍



各神樂と拜し畢まふ。大衆の命にやう。又大衆等が陳小進と稱遠回の結構小休て。兵
 庫頭頼政とて憤る。然もども豫てやう。主権現と信むる処争。皇命なりとの事と。
 神樂小對てやうと響んや。然も路とて開きて大衆等と通まげとて。召令
 小背くるまじ。法てよと通りんとあう。是派る一戦小及びん。大衆等ハ豫てより。勇
 名の傳えあり。然るとまの盛る。平家の固め。支勢小怖て頼政如き。小勢の陳小
 對ひと世小傳えあ。瑕瑾小りやひみる。篤く思惟一のふ下。とのみ賄るるを早に雄の
 義法師們的。夢もあむ。何糸瑕瑾とのするのあむ。押通とやと云やく。又と接津律師
 高雲への橋の倉儀。若老。年老ある。大衆と判。只今の使者の口。遠遠の道理。必極せる。又
 勢小光固め。言と。ち破て通りんと。神威人ハ俱小潔。小勢とて透。通りん。後代までの
 恥辱あり。殊小あまざる。頼政ハ六孫王の源氏の嫡。弓箭小放て。その名と揚す。又
 道小妙と得。う。近衛深田在世の。深田花との願と云。さま。く小秋詠せる。ふ思の

いと蹠蹠頭ありとて。人々嫌煩らひ。頼政要時うち案じて深木の本の木の梢
とも見えさじ。桜の花小あらしふけり。と詠ふ。光と若と姉め。人々を称讃せり。か
男の固きを念う。恥辱と見せさる。いふ骨を奉勅ある。東の陳頭待賢門
より。入奉れ。といふに依て。その後小回。東の陳へ對ひたり。さへ内大臣左大臣重盛朝
臣固め。人々脱小双方の闘陣とあり。大衆うち負て神樂と捨遠く。小逃返たり。ゆえ
後。もまた天勢降起する。ゆふまは是非あり。大納言時忠とて。衆徒等が憤るを
宥めらる。と師高と眾より。其後治業四年。小あつて。平家の暴虐のや。長し。若上
と凌ぐ。ふとある。も心あき。も是と歎き。思ひぬ。あり。とより。爲頼政也。音添家
の嫡流とせ。と曉ぐ。の埋火ある。で。在る。元元小世と送る。元道の平氏。が指揮と受。は
いと。安全あるとぞう。折もあら。ふ。兵を奉。逆を討て。宸襟と休め。奉ら。ぬ。と。思
ひ。う。と。微力ある。ま。鈴方あり。空あ。く。月。日と。過ぎ。と。なる。が。子息伊豆守仲綱。の。葛蒲前

の腹に生えたる馬の固より家の飛なり。有職小も暗々む優小難しき人なり。木下と云
 名馬と高ひ。日來秘藏し。うろ。平宗盛き及び切小難を。うろ。と仲綱是と。此
 頃餘す小糸寂りし。芳賀が為さる田舎へ遣し。いとひきま。詮方ありて止け。宗盛
 飯(性ふく)か馬と田舎遣しと言ま。仲綱が虚云之昨日も甲乙が受う。今朝も
 庭糸とあり。る。む。く。小ひければ。ぬ馬と悟む小こそ。其後あら。我田の催促して是
 とえ。と夫より一日小五度七度頻小その馬と云け。と仲綱右左小ひ賺て。ふ。と区
 ける。頼政。ま。ま。と。小。難。と。あら。遣。へ。太く。悟。め。と。ある。と。練。め。ら。れ。て。詮。方。な
 く。日六波羅送。り。宗盛庭へ牽出して。是。と。ろ。ろ。小。双。び。あ。き。名馬。光。あり。け。と。云。
 いと賞就。あ。り。の。う。仲綱。が。か。ま。せ。小。香。牆。を。憎。さ。と。そ。の。馬。の。名。と。仲綱。と。呼。び。寄。
 ある。毎。小。仲綱。と。牽。出。せ。仲綱。小。鞍。お。け。よ。と。嘲。弄。ま。仲綱。是。と。風。情。で。ろ。小。も。換。ド。と。思。ふ
 木下。鹿。毛。と。時。の。権。威。小。詮。方。あり。と。う。ろ。ろ。と。ある。小。辱。あ。ら。と。天下。の。胡。虜。と。あり。ぬ。

とせよ何の甲斐あるかと大に懐くもつけざるを頼政は言詰り絶す。法外の舉動
 の其後あつた所存あり。と密使宣を窺ひけしごとた右の計ふ術もあり。不
 以仁親王の法皇弟の皇子ありて新院の出見なり。一條高倉小室まにより。余官
 とかけ常の所所へ往きて脱逃し奉ればまき使宣ぞと頼政一時四傍に入る
 と驚ひ召し法皇弟の皇子ありて四位より即ちさきとか親王としてせむも。
 偏小平家朝権と極め我々无道の餘殃有り加旃の程い祖父法皇鳥羽殿小幽
 せんとて来ますといふ小思ひ召付らば速小義兵と奉惡逆する平氏を滅し。
 法皇の幽居と慰め君位を踐む忠孝全きを為さる。疾く思召さるひ令旨と下
 未賜ふりのなら諸国の源氏恨みて雲霞の如く参ざべ。そとのみ入道が衆計
 らひやす。と誠を彰いてつけきど宮内頼小由兼引なく思ひ煩ひひるぐその頃
 少納言惟長と人を相まると神の如く小室にとども言葉小差ゆむ。ふ放て系中の

貴族指神子と崇教して。その名隠れ多くせざる。先頃所へ召さる。官も相と親
 せり。惟長敷とて必しも。帝位不即多し。とせしむ。忘るる。今頼政が勅
 せり。惟長がや。時節の列に未し。必し。と云ふ。小の當ます。二兩日とて。頼政不即
 引の由令あり。則宜き計ら。と令旨數多と通さる。れば頼政深く愁びて。故
 為義が末子。新官十郎を盛家と倍ら。甲斐信濃と姑と。その餘の源氏
 知ら。早と上落あすべ。といひ會せ。せざる。不許て。義盛の近より美濃尾張の
 源氏と姑と。木義仲。伊豆の怪が思ふ。小判。流人。前右兵衛。佐頼朝。小判。なる。

のとて、宮中・外のこととは、大小の勢を思ひ召し合せんと猶ほ、折首長谷初信
 連とて大別の老居合せざるが箇様とあるのと云ふ女房の姿不協へ宮に落し給はせける
 依連も法俱かと頼み令あれど御所お某が侍らふとい人まきよく知りていふ甲斐あり
 教示も遇で、落し後日の恥辱を因て出所お踏止まり。付々未だ思ふ小我ひて一方を切抜
 血跡より参るべし。と回美はては所お飯り。残り居る女房小見苦敷りの把収させ得間
 程あかぬ軍兵混じりと奇甚。官内録叛の正陽とあり。別業宜を要て檢非違使両
 人迎ふ。承りて。疾く出るべしとのふ信連をてきて這ハ置たりや。録叛とい何るぞ宮へお
 宿るまで。長兵衛尉也。困らせり。尾緒あるハ頓返け。と呵々つれば官人等。を候あぶ
 世所中と探し奉れといの間もあり。なると礼に入る。信連嫌て覚悟のあり。衛府の太刀など甲
 小腰羽。倚来る者の様ひち。ある幸ひ秋休む。この遠ハ後籍と云ふ長わと水車小輪にて突
 てかゝる。依連ハ猶事とゆせま飛香の如く身を落りて。先先進に官人等十餘人を截倒。

けき、並居る平家の位ども現ぬや、人盡千と云ひある人か、大世の並居る石

等を先とて都合その勢二万八千余騎本陣とてうち戦て宇治橋小押寄り。其を破と揚る。

宮の方にも関と合はるゝの先陣の橋の板に残らざりて。押さか称們と声かくと
 と。勇と立る軍兵も。更小耳小も。入とび曳と声。お押やと。小端と。河へ臨て。浮つ沈つ
 漂ふ者。その数と。知と。うづ。か。新小宮方より。筒井の淨明。矢切の但馬。一來法師など。皆
 え。井も。小。その名と。得と。荒法師。おありけれ。疎き橋。何の苦も。う。ち。後。了。攻
 撃。小。或ひ。小。挂ら。して。美例。小。落る。も。あり。又。小。近く。射ら。と。嗟。と。言。い。ど。轉。ぶ
 も。あり。と。の。法師。武者。が。為。小。討。る。の。四。五。十。誘。小。及。ど。も。大。軍。あ。と。小。殊。と。も。せ。む。叫。き
 喚。ん。で。挑。戦。ふ。数。と。ど。も。橋。桁。の。疎。き。が。上。の。聞。ひ。あ。と。小。多。勢。も。更。小。の。甲。斐。あ。る。于。時。上。総
 公。忠。清。の。大。將。軍。の。雲。前。へ。参。り。と。の。新。小。の。戦。ひ。の。何。時。果。べ。と。も。お。り。え。む。河。と。渡。り。小
 着。へ。な。け。と。ど。折。あ。も。五。月。雨。小。水。重。増。と。馬。の。足。と。難。う。ん。を。い。う。小。せ。む。と。言。も。果。ぬ
 小。下。野。の。佐。人。足。利。田。原。又。太。郎。忠。綱。先。陣。と。呼。び。て。馬。と。旗。と。う。ち。入。と。ま。は。小。励。さ。れて
 日。れ。め。ぐ。と。馬。う。ち。入。は。中。小。俘。虜。侍。の。兵。ど。も。馬。役。と。組。て。渡。り。蒐。小。烈。り。さ。水。小

お流す。萌美緘赤緘花や不獲するが水小浮そ漂ふさる。仲細遠小うち視や。
伊勢武者へまひき。の得悉て宇治の綱代ふかりけるうとかく金草の中では荒
うふる。この傳も大ねかて先陣田原又太郎。その餘の軍勢河うち渡り。平家院(政
かる。元来頼政は元勢之恃に切る山門へ心憂て言甲斐多。南都の勢いも未だ今と
最期と思ふ。官と落し来せんと雲時ら老防矢は源大夫判官兼細も終討さ
ちひり。伊豆守仲細も深痕教多負星を拘致入て自害し。頼政の家隸る。丁七
喝と俵へ振き。吾首討てと宣て芝の上小坐一扇を開て二首の穢世と詠どる。埋本の花
さくともあつじふれる。そぞあれなりける。恥て腹き切る。唱の首と討落し。石と縛
て宇治川の早き瀬小沈む。滝は競とき遠で泉下小忠を竭けける。頼政遺の迹を扇の裏とし
周小の滝は競宗盛と欺きて南嶽との名馬と奪ひ金印として放せる。かの木
下の報いせり。是等由精く鏡にとすれば驚きを以て是と省く。看官宜く察し。

頼政二世の物語をいふ所のその大略なり。大内少将を討て。獅子王といふ四知と宮女を
 浦と湯ひる。むきぞうらふのまゐる。或ひは宇治殿と連なる。又保元軍後の事。
 この外にも種々の物語ありといふ。但人小膽多き事。
 初め所あり。和漢三才圖會を按ずるに雲間の怪を討て近衛帝の不豫を止ま。
 二條帝の時天上の鶴と射落し。其名大頭と載る。然れども近衛帝の時怪鳥を
 射て怖悩を安んず。その鳥の鳴声鶴に似ると云く世間小傳をき。二條帝の時と云
 といふ。二條帝再び似る事あるを。
 栗山愿の曰く以仁王の二挙功なき小似りといふ。浄海の強暴敢て責るものなり。然
 ると官の軟質を以て血を濡さ袂を投。宿仇罪隸を斬。平氏百萬の兵と抗む。
 事成らばといふ。大義既小天下小伸ぶ豪傑頼て起。義兵以て奮果して維功ぞ
 やと摘要。実小頼朝義仲の義兵。の舉小周て萌せるあるべし。

清盛
 太政入道

重盛
 小松内府

維盛
 三位中將

資盛
 新三位

清経
 從四位下

有盛
 從四位下

忠房
 從五位下

師盛
 從五位下

宗實
 從五位下

平重盛

入皇八十四代 高倉帝治養三年八月日薨
 今安政三辰迄六百七十八年成

平重盛者清盛長子也平治之乱守

禁中與義平相戰數回遂立軍功官

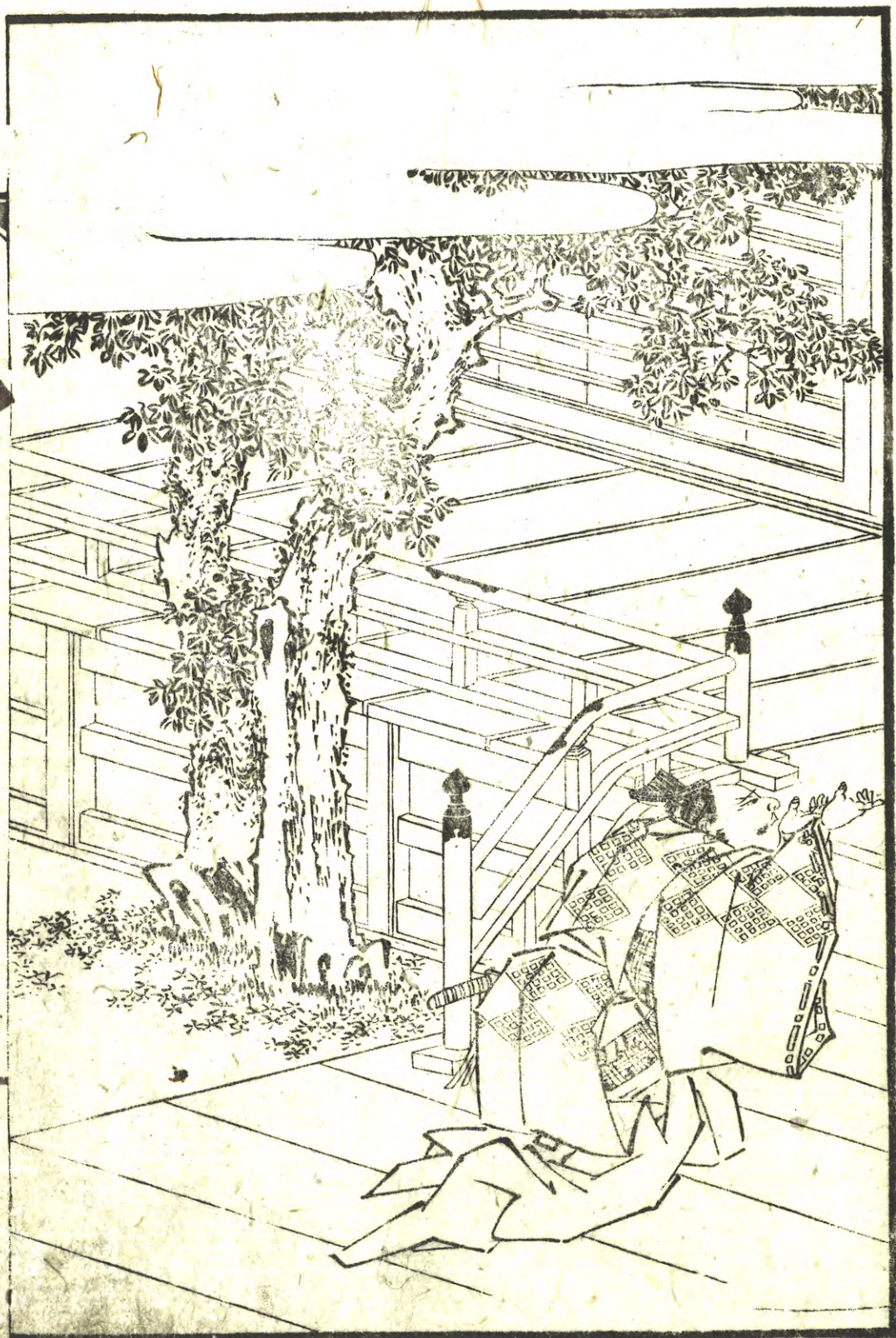
階登庸任内府兼左大將舉世皆仰之

不幸即世無不哀惜焉

清盛父子熊野に宿信頼義朝等その亡し時とて兵を率ひの乱あり。重盛
 破て速に降洛し賊を討て。小治て授乳一時に平らぐとて得たり。実小文武
 兼備なり。忠孝に篤く。克人て悦服せむ。今朝の賢人と稱すべし。

君玉堂藏本

羊
耳
氣
反



重盛公の圖
俊美

回春て世前へ来りけとバ件の蛇と捨よとて仲綱小ぞりいささける。かくて翌日使者
 と名馬二匹と仲綱小贈り。昨日の事誠賞謝と仲綱謹とてことと謝し。昨明々
 昨日の事何ぞ還城樂小似する。と大少優美を褒へとる。還城樂の舞の容と宗
 盛法で仲綱小。木下廣毛と望めるとその差雲壤あり。一時重盛病小伏して。醫務所を
 ども殺す。又洋海深く屋への頃高麗より名醫来る。彼を召て療養せ加へんと流
 法守。家貞より言せけと。重盛枕と據けてと。今畏よりいども。その口綱小
 應どが。如何とあれ。人令へ元定する所。あつて良醫。由自由とへ。然るに
 遠く異邦の醫。ふ。の病ひと委ねんと。本親小醫。る。如く。重盛と。きの。身と。惜
 と。手本親の恥辱と遺さん。の。あ。ハ。許し。の。こと。と。回春の。ハ。洋海。彼。その。職量と
 感と。とい。是と。必と。看ると。た。ハ。青王山へ金と贈る。大日本国重盛神坐と。還を。帳へ。虫
 載て。眞福と。修せ。とい。ハ。金く。作者の。戯文。ある。ん。を

平教經

人皇八十二代 安德帝元暦元年戰死
 今安政三辰追六百七十三年成

平教經者平族之勇將也工射西海
 南海之間連戰連克壇浦之役欲與
 義經相接而不成遂奮呼投海而死

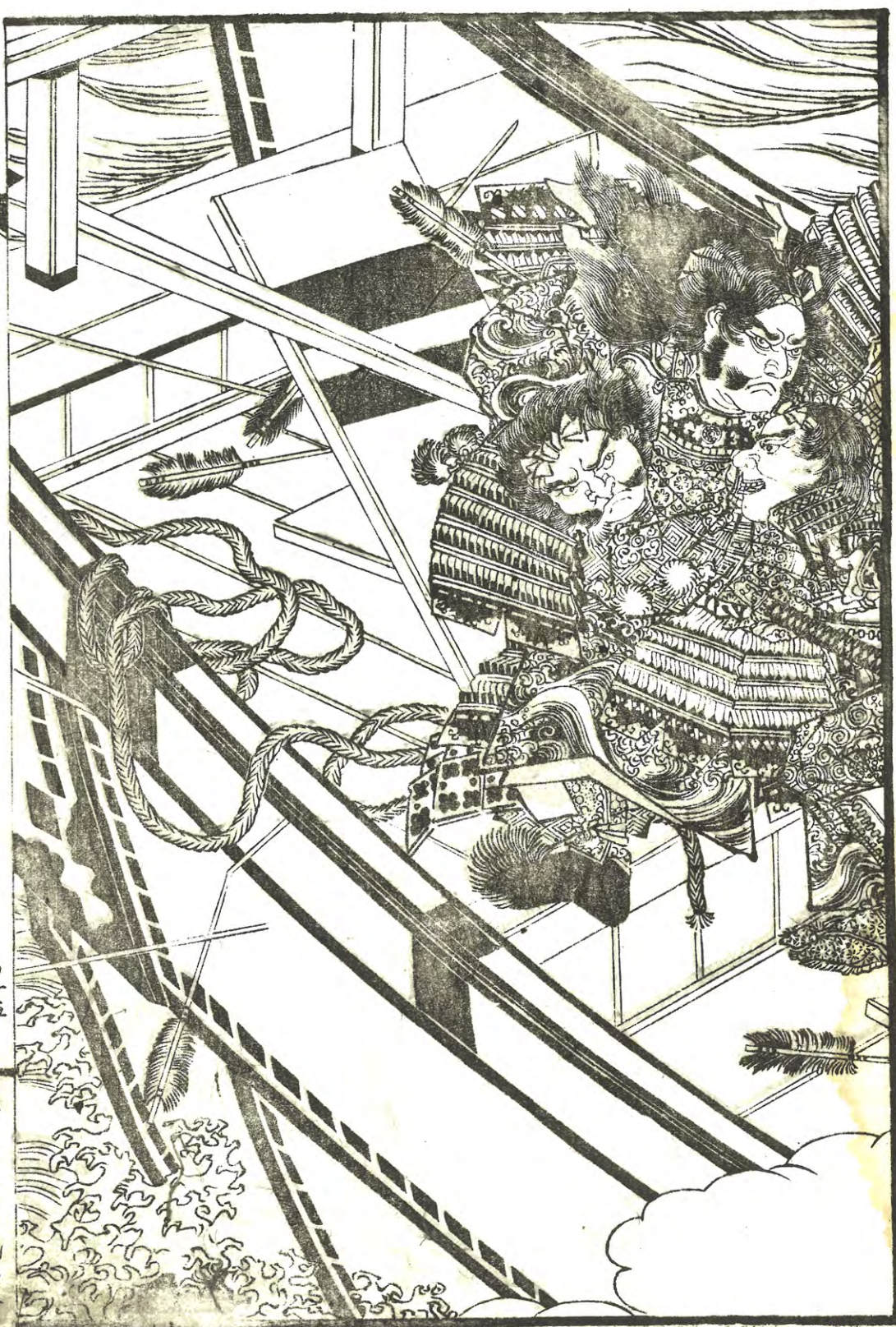
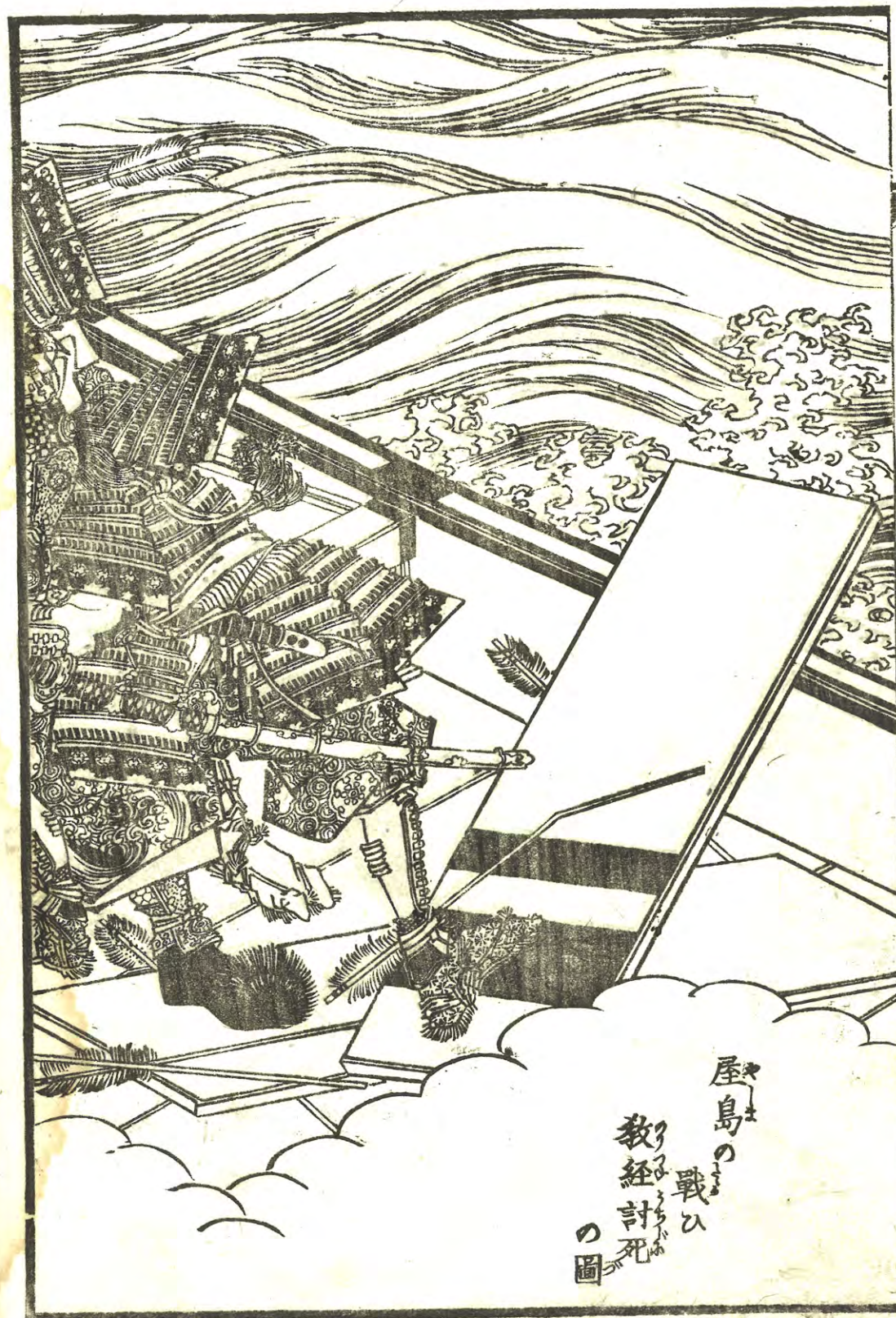
清盛 相國入道
 家盛 從四位下
 賴盛 正三位大納言
 池殿と号し
 通盛 從三位
 忠快 中納言
 伊豆国流入
 教經 從五位上
 業盛 從五位下
 一谷と討死
 此外女子累に

平家義仲の爲に都と遷落さ。一旦南海の彼と不潔ふと。又ども。知盛教
 経より。針策と廻ら。不吹者と攻伐と。再び。抄津と。不。飯と。十。歩の。兵
 と。督と。一谷の。城。墨と。終。源。家と。降と。事。り。と。い。と。是。候。が。教。經。の。功。績
 あり。然。と。い。由。時。運。順。き。竟。に。義。經。の。爲。小。の。城。墨。と。屠。り。は

平教経の経

出自家系前小如。世傳不能登守教経ハ平家の勇將引て射飛小
達。実小法弓の精兵加旗智縁赤紫凡虞の乃并るねハ我々毎小教を
威依。向ふ所とて勝ざる。真なる平家の一族南海小をうと。中玉の保
氏頼朝小心と傍て平氏小叛く。教経怒て結軍と督一城と屠て墨と核。勢ハ凡の
突まるが如し。小曾義仲花洛小在。そのことばて心安う。矢田義清小征伐せ
む。平家ハ例の教経とて。依中水清小出張。奇計とて。撃。此戦闘不
小突つて。義清ハ小戦死。源軍大小潰を。小於て中国に平家小入の叛く。の
る。竟小一谷小據とて。時義仲功小終。種く源礼の。ある小因て頼朝法
自美令と栗頼義経の二弟とて。義仲と栗津小伐つ。平家その虚と窺ひて再び洛
入らんと。小件の軍頼小果て。頼朝義経兵庫小向。丹播西州の境なる。草小陳

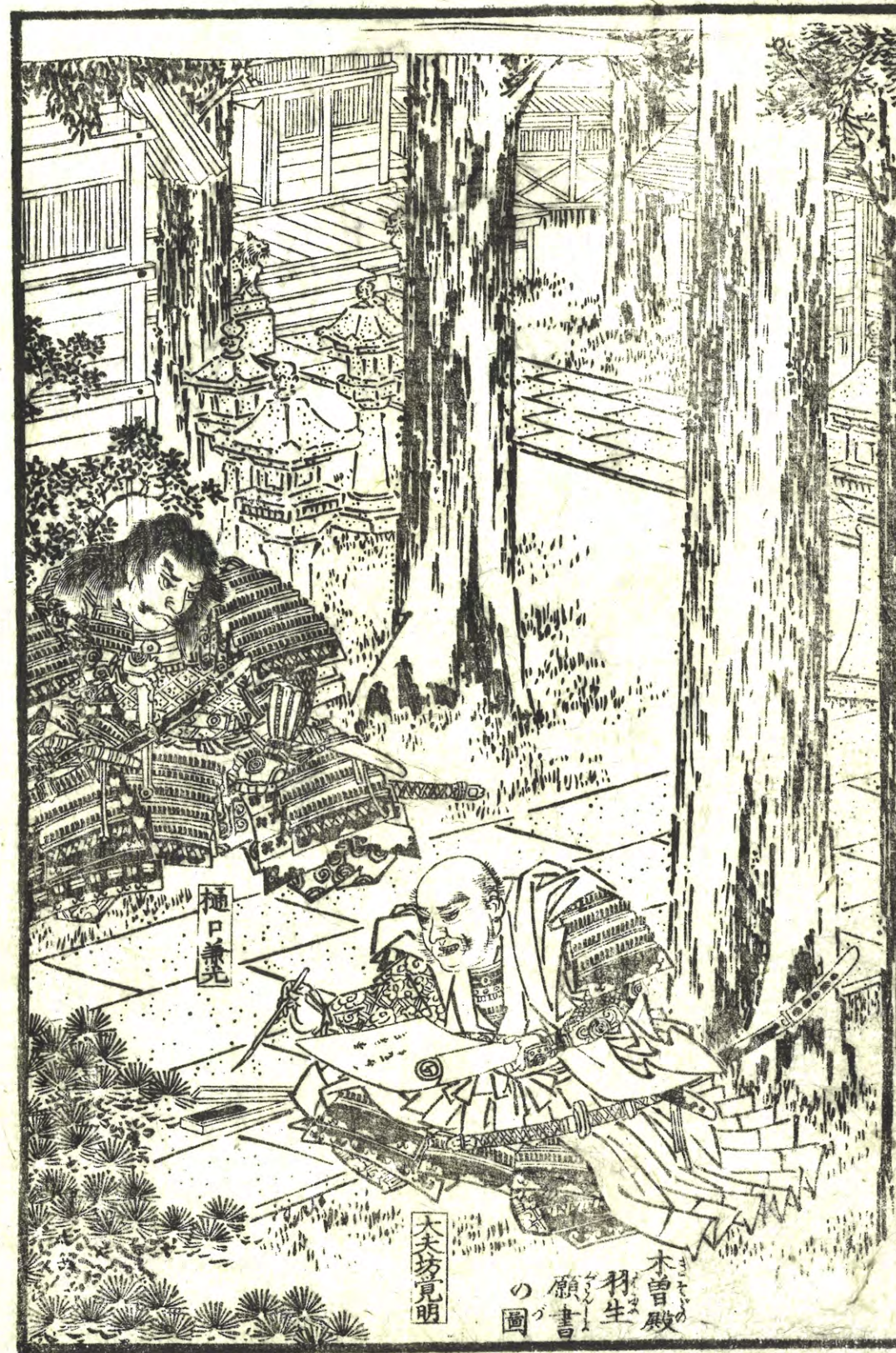
と。平家資盛新有盛。左。とて。是と逆ハ撃。むるに義経賢智の。ある。不
い。平家の陳と。平軍。さ。ね。礼。周て頼朝ハ生田の。義経ハ兵と。領。一。隊
ハ土肥次郎。眞平と。西門小向。ゆ。その。乃ハ。平。餘。兵。と。卒。野。城。小。ら。ち。對。其。奇。策
神の如。故。平軍。一。谷。と。逐。落。さ。ま。て。波。上。小。漂。ふ。教。経。が。如。き。勇。將。も。味。方。の。崩。と。立
に。至。つ。て。如。何。と。も。詮。方。あ。く。心。あ。ず。も。城。と。兵。抄。津。必。兵。庫。の。決。小。副。て。落。仲。人。と。せ。れ
と。源氏の軍兵。逐。逐。来。ち。と。討。取。人。と。あ。め。得。小。教。経。例。の。勇。と。彰。一。道。く。の。を
或ハ。抛。捨。或ハ。お。捨。て。徐。く。と。弱。が。林。ま。を。落。る。と。安。田。遠。江。守。義。定。あ。る。者。追。近。て。討。人
と。ま。教。経。馬。と。引。返。し。大。々。と。援。て。お。合。し。が。終。小。安。田。ハ。教。経。小。其。甲。と。う。ち。破。れ。馬
小。た。ま。う。む。清。る。所。と。教。経。押。て。その。首。と。把。ん。と。う。その。折。う。安。田。が。甥。な。る。一。條。決。死
忠。頼。と。の。の。馳。来。と。矢。庭。小。教。経。が。下。散。と。捆。え。馬。より。引。却。力。と。究。め。て。組。足。の
教。経。優。し。き。挙。動。や。と。要。時。が。得。ハ。謀。合。し。が。教。度。の。我。ハ。小。心。神。旁。と。殊。小。數。箇。野。の



源義仲の略

義仲の略を云ふ事多き中、夫不意と云へる、今并兼平桓に兼光楠親忠根井
行親を以て、木曾の四天王といふ。また大友方、有明あり。遠くその以前、進士藏人通彦と
いける人老。又、木曾通下武備を兼ね、固て義仲を愛し、傷を離さば仕へ、丹生
八幡に捧る願書。その有明が案文、老古、今、独歩の名文と名。木曾三願虫のその一あり。盛
衰記及びその餘の書、小詳を云ふ。少果、其の供初、の如き文武の才人多く、従ひ、魔く
といへども、その時の至らぬなり。木曾小潛とありける。新宮十郎義盛、後、高
倉宮の令旨と持来。如き、そのようと言ふ。木曾固て此中、異を有る。領兼。不日、小討をん
とせし。そのころ、早くも、奔る。宇治、老頼政、討死。宮内、光明山の下にて、流矢、小中
で、薨。その人、と云ふ。及、忽ち、地を、と云ふ。失ひて、時の動靜と、窺ひ、多。頼朝、東、及、小旗と、揚て。
頼朝、府、と、閑人、と、なる。由、云、え、け、ま、今、の、猶、嫌、ま、き、に、あ、ら、び、と、云、勢、と、引、俱、と、道、と、

伐人、と、ま、平家、此、より、受て、城、旧、所、助、長、と、城、後、守、一。木曾、進、討、と、令、せ、は、助、長
畏、て、軍、と、怒、へ、脱、小、奔、向、ま、る。の、如、路、少、急、病、小、罹、果、一。六、諸、軍、機、と、失、ひ、て、本、國、小
飯、是、小、周、て、中、長、茂、家、跡、と、嗣、で、城、後、守、に、任、ト、奥、羽、城、三、及、の、兵、四、万、餘、人、と、云、
と、信、及、統、麻、河、の、も、小、奔、向、と、義、仲、依、田、の、城、と、長、茂、小、討、一、奇、策、と、施、一。一、戰
小、こ、ま、と、破、は、長、茂、が、嘉、士、山、野、太、原、と、丹、房、等、死、と、云、及、小、う、ち、負、け、ま、長
茂、が、軍、大、小、敗、れて、遠、く、小、討、飯、と、小、討、て、北、國、小、あ、ま、と、老、な、る、じ、六、義、仲、に、天、王、等
と、て、北、陸、の、板、城、と、と、云、六、風、小、原、と、降、と、魔、く。の、勢、小、木、上、治、と、平、家、と、退
討、せ、ん、と、強、せ、ま、と、け、る、が、頃、の、壽、永、三、年、春、と、月、不、慮、の、と、と、云、未、お、け、と、是、より、前
の、と、云、じ、甲、斐、源、氏、小、武、田、五、郎、信、光、と、云、人、最、屯、の、女、と、お、り。義、仲、が、嫡、子、と、志
水、冠、者、義、高、小、妻、合、せ、ん、と、強、せ、ま、と、小、義、仲、曾、て、美、江、と、却、て、信、光、と、愧、め、け、ま、
信、光、大、小、憤、と、頼、朝、小、難、言、す、と、云、義、仲、城、後、の、長、茂、小、う、ち、勝、て、更、小、忍、と、云、と、



傍で。今より系所へ攻登り。平家退討へさるる事ども。実ハ平家と同心して鎌倉を
 撃んとする条。その結構宜うおぼり。急ぎ四味成あつて。人ハ胸と腰の患へあらんと意
 巧みさうさう。平家頼朝ハ狐疑深き。大おそれありける。やどふ忽地こきと突くと。東家の
 兵と募り。その勢勢約十万余。本曾退討して鎌倉を奪ふ。義仲こきと突うり。由
 大おそれ。さ城中小在る。三千餘騎の兵と率て。信濃と越後の境を。越後小陳とさる。
 頼朝ハ信濃。善光寺まで到り。ま下義仲ハ今井四郎。兼平と使言とて。頼朝
 の陳へ遣り。掠奪回す。仲と謀伐の。あまを。一帯向と。善光寺と。勢勢少く。引退と。意途
 ひひど。その罪とさる所とさる。但叙父行家と。舎脱をたひ。止事と。得ざる。全く疎
 忽と。なざる。あま。前小平家の天敵と。重なる。同士討と。致さん。と。世の胡虜。ありやれ
 らん。と。演さ。け。ま。頼朝ハ。今井四郎。小對面。仰の如く。天敵と。図て。同士軍。せん。ハ。本
 意にあらねど。脱小頼朝と。登んと。結構あり。と。及。ハ。罷て。向て。是。退つ。け。見。参。致

志。と。返。答。あ。ま。兼平ハ。直。不。作。と。初。と。ま。う。以。義仲。再。び。別。人。と。使。と。さ。る。作
 の。頼。き。義仲。切。見。え。ま。斯。中。以。と。も。疑。ハ。深。き。小。放。て。ハ。一。通。の。記。請。文。と。添。え。て。又
 嫡。子。兼高。と。質。と。て。進。志。と。城。中。見。り。ゆ。さ。れ。け。ま。ハ。一。將。の。頼朝。兼高。あり。其
 ま。お。厚。く。宣。ふ。う。ハ。争。頼朝。兼。引。せ。う。ん。然。ら。家。隸。あ。ん。と。義高。と。連。と。
 一。と。頼朝。平。四郎。義。実。天。野。藤。内。遠。景。と。遣。ハ。さ。は。義仲。一。紙。の。記。請。文。と。總。め。封
 者。兼高。ハ。海。野。小。太。弟。行。氏。其。外。望。月。飯。坊。藤。氏。と。兼高。と。千。騎。を。かり。さ。
 副。て。兩。個。の。使。と。さ。れ。や。且。兩。使。と。各。應。ず。馬。と。と。引。せ。う。同。情。天。野。中。其。恩
 と。謝。し。兼高。と。伴。あ。て。本。陳。敵。り。け。ま。頼朝。ハ。ち。秋。び。冠。者。兼高。小。對。面。と。い。ま。こ
 次。人。の。子。と。持。給。ハ。娘。大。姫。と。三。所。お。り。我。子。に。せ。ん。と。相。具。と。鎌。倉。へ。帰。す。の。ふ
 周。小。ハ。頼朝。言。語。の。如。く。義高。と。大。姫。君。の。婿。と。て。あ。ま。う。が。義仲。法。白。美。の
 怒。ふ。と。栗。津。小。戦。死。お。り。後。密。小。兼高。と。失。れ。と。其。沙。汰。深。と。る。り。ハ。海。野

藤別妻實盛股野五郎景久戰死。諸將敗走。未肯降。乃於義仲八親

此の屋鴉小里大狸と補理他多々仕え事より。天皇及び宗盛以下。皆く不

安堵せり。然るに備前佐中の源氏等叛くより嘆えけしべ。能くも教誨なりとて、
のめうちこみ。よろちうど一かえん。つかけ。あひ。つき。
との老を討平らぐ。因て中国の士大半は平家小靡き屋敷けり。その威勢ふたふ。東路近
きものぞ。せんじ。ちやま。きよ。ようい。きこ。
責登る。先途の恥辱を雪めん。と準備あり。よし。すえーび。法皇義仲と行家と良
おあ
て早く心伐さへき。作食らしけるに義仲兼王箇計の故自刃刺すまでもいとだ
やど
そ。矢田判官兼清宇野平四郎行成と天狗とで五千余騎の軍兵を援け。はな
ふ
の玉へと出立む。然にあね備中水島におれて平軍と大戦するが。教授が南威
さん
察して矢田兼清討さげし。深軍大に損傷む。義仲はて安ろくと自ら平勝と
ひさひ
幸て備中へと奔向む。その時行家の花洛にお註し。頗る隠微の企あり。本曾連討てり
ふ
精進後と頼んとかけけし。今井兼平とまで言。早馬でもてあると。義仲は告る
やど
やど。小義仲は一大事と最なる敵と。を都へと引返す行家初と彼より
ゆ
も。義仲来に於て。あら。小教難。途引違て備中に飛入。平家を代て義

[illegible]

我平氏と亡し。上の家祿と休め奉る下は民と救ふあり。然るに何の罪ありあつて討つ
 宣旨と行家小賜る。かゝる及復表裏の君然あらば。此方小も給方ありと書きて。
 富家の賊室と様と。或は賓客ある家小押入その珍膳美味と奪ひ或は加茂八
 幡石清水祇園北野の神領。不忌憚らば青田と折て馬の飼料小しけるあそ系
 中。小元満る軍兵等。は是と見て。いと面白き。小思ひ或は眉目よりき。婦女と奪ひ或は
 主人と逐出。て己が居所とある。あんど後。藉言。借小絶し。とて。法皇是とぞ。良き
 波判官。知康と勅使。小まら。と礼。妨と様。むき。より。今下さる。本曾。ハ勅使。小うち。對ひ
 その勅。答。と。為。も。せ。び。足。下。ハ。就。の。判。官。と。い。ひ。難。さ。鳥。解。の。考。定。め。て。万。人。小。打。と。す
 う。致。さ。う。と。嘲。つ。と。を。終。わ。し。と。法。不。道。ま。知。康。三。言。と。も。せ。び。引。返。し。平。氏。小。儀

する惡。況。より。早。く。殊。儀。と。加。へ。ば。天。下。の。大。事。と。出。し。と。ま。し。と。奏。し。け。ば。法。皇。大
 小。致。さ。る。ハ。則。知。康。と。大。お。と。結。合。の。勢。と。招。く。ま。暇。ま。あ。る。ま。ば。最。心。と。始。め。二。井
 ち。の。惡。傍。ど。も。と。し。ける。洛。中。に。あ。る。軍。兵。等。も。義。仲。院。の。出。立。と。ま。家。を。け。り。と。破
 及。び。本。曾。小。叛。さ。て。官。軍。小。加。る。者。も。少。う。と。ま。然。し。官。軍。忽。地。小。二。万。人。計。と。あ。り。ぬ
 今。井。兼。平。等。と。破。込。の。外。あ。る。と。と。殘。さ。お。ま。て。義。仲。小。對。ひ。ち。と。休。せ。地。と。脱。全。く
 野心。と。な。せ。ね。有。也。仕。あ。つ。て。然。る。と。さ。う。く。ば。妻。家。の。滅。亡。あ。る。と。理。と。ぞ。と。煉。し。と。と。
 義。仲。小。義。仲。に。せ。て。我。北。陸。小。兵。と。奉。て。未。二。回。中。不。言。と。と。ぞ。院。小。も。あ。と。主。手。小。も
 あ。と。地。と。脱。と。あ。る。ま。や。と。の。家。あ。る。が。此。方。より。運。寄。と。め。ひ。知。せ。未。せ。んと。憤。り。諸
 軍。勢。と。怒。る。兼。平。大。小。果。と。恐。い。遠。ハ。狂。氣。の。出。舉。勅。曲。て。止。ま。る。と。と。再。二。再。四。練
 て。も。敢。て。入。る。風。情。も。あ。ら。ば。と。時。の。間。小。進。發。と。法。任。寺。殿。院。の。向。ひ。け。と。と。ぞ。は
 判。官。知。康。ハ。遠。來。地。小。登。て。諸。軍。と。指揮。と。然。し。と。も。ハ。漢。王。元。來。軍。旅。の。と。小。跡。く。散

と上りおつて。法皇自ら愛し人の傳のくみ及ぶるまじき軍大將とあるのう。築地
を東西に池まわりの左のあひの城と雲さ右の金剛の鈴と振つてうまやばる滝の水は
ハ滝の水に流ひ舞ふ是と云ふ人判官の矢射などの所為と云ふと早きぬおるなり。于時
義仲軍兵と七隊別て進み近き所判官斬と射て落せ。指揮軍兵弓法と云ふ一
懸ふ夫と放てば知康懼とて遠く小築地と飛下り逃るなり。其下義仲下知と傳え四方
八面より火と懸さる。折りの烈き風火火燭十方に飛散て黒烟天と爲す。法皇聲
おぼろ火と避るゝと木曾取奉るゝ條の内裏へ押込奉はは敵山の貴主明雲僧正
と井寺の長吏八条宮圓慶法親王も夫小中やと失ふかて義仲今般の一挙に
御教上人のうち。法皇と勅め奉つゝ小因なり。と二條中納言朝方と姪女官武官
結玉の守代十九人の官職と剥ぐ。と小松殿の義仲にさして泰ふとありけり。と義仲
が方小来らと凡人長とて朝家と我佐ふ。殊小若と押込奉るゝ或ハ高佐の官の

人と解官停任せむと必の外なる解車とて天照太神正八幡もさそふ怒りのありあ
然る則ハ世車が身小との罪報とてさのあふ。と道順平家朝憲と云。我佐非道と行ひ
とまば脱ふ子孫沈淪と云。是よりさ繼あていそと預ふ。法皇もや奉る。解官の人と云
官小復。夫の道と行ひつゝ行末目とささてさるべ。と細く異見せむとけれ。と海
仲も然さ。法皇も五條の内程よりや奉る。大膳大夫業忠が六條西洞院の弟小
所幸のや。解官の人と云。悲く本官小復せ。と奉て安堵の思とさる。かくて其幸
も暮て青永と幸小なりけるが改元あて元暦との六月頼朝鎌倉小在。其才蒲
者頼朝源九郎義経と兩大將とて兵と授け。本男が後藉と鑑人として添ふ。と
改元けと。義仲大少将と是と防ぐ便所と云。然るに備前と行家の河内小在。と
心と企つる。と改元けと。是と追討せん為ふ。と百餘騎と。頼朝と頼光と。河内へ
向はる。と小鎌倉の西大將尾張の勢田より相別とて宇治勢田と押寄。と蒲行老範

頼の武田加美一條板垣千景和田河被橋毛と姉め。里見大田小次郎と。その勢が合と
 万五千騎。近江の勢田小次郎に。源九郎義経の安田大内島。土肥佐々木左衛門源次郎
 曾我と姉めと。伴勢の郎以下宗統の郎從武藏坊辨慶と。其勢合と。二万五千騎
 伴勢と。河で宇治へ。本曾義仲の今井兼井と先鋒と。勢田の橋と引落し。旗を
 掲げて。敵と候。那和を郎。江澄小百騎斗りと。相副て。院中と守備と。さうめ。万一の軍に利
 とある。院と取奉と。西土御幸と。系らせと。權えと。義経宇治川小次郎と。その
 河に渡んと。二更の。小次郎。本四郎高細。梶原景季。兩人共射て。渡けと。味方へ
 と。小次郎。入。着。き。続て。と。渡。り。義仲の勢。と。先途と。今と。捨て。防。げ。とも。孫。念。の。軍。勢
 勇。威。烈。を。固。より。衆。寡。伴。あ。む。義。仲。並。に。うち。負。て。憑。き。切。る。兵。も。刻。に。落。て。栗。津。の
 の。ま。不。到。今。井。兼。平。と。行。過。て。自。盡。と。決。り。小。次。郎。深。田。小。馬。と。系。の。ま。打。とも。あ。わ。せ
 とも。馬。進。ま。ず。石。田。為。久。が。遠。矢。小。中。つ。を。竟。小。栗。津。小。今。と。隣。近。兼。平。も。快。く。主。小。自。害。死

させんと思ひたる所小躊躇せ。敵を防ぎて戦ひけとぞ。今いふ心、神常も、覆ふら矢、蓑毛
 の如く、救箇所の處へさ、負けとば、是までなりと、鞍壺小、衝をあらせ、今井四郎、兼平
 が討死する。そ、園東の着刀、称们とぞと、視て、法則ふせぬ。と、太刀の鋒を、小、衝へ、馬より、落
 倒に、垂下して、丸軍の中に、死する。天晴る、別の者と、感せぬ。の、いなり、いとぞ

周小の木曾中三権守兼遠が女児小巴といふ容貌殊小麗しく心割る婦
 女なり。義仲が妻とありて毎度軍陳小促ひ。勇威と顯せと屢なり。而時中陳小
 在て劍の如く物の具は群ぐる敵陳へ割て入る。まると僥倖難くそ砍て敵救多切
 て落し内田之師を主とてつと討とんと馬と進め。竟小巴と組ず。巴は必双
 の勇力まじり難なく内田と取て押へ肩と捨て息切く。而時和田小を師義盛舊地
 小馳来り。渡り合て戦ひ。巴は救箇度の戦ひ小腕弛之精神劣と殊小味方も敗
 小敗をすに氣後まつて終小義盛小生捕る軍散と後義盛は鎌倉殿小と一

郡王堂

源頼朝

人皇十三代土御門院正治元年正月薨
今安政三辰追 六百五十八年成

爲義
六條判官
義朝
左馬頭

義平 惡源太
朝長 中宮大夫進

三ツトモ
頼朝 右大將
セイイタイシヤウザン
征夷大將軍

頼家ヨリイハ 左門督サモノカミ
從二位
鎌倉三代將軍

實朝 右大臣
同三代將軍

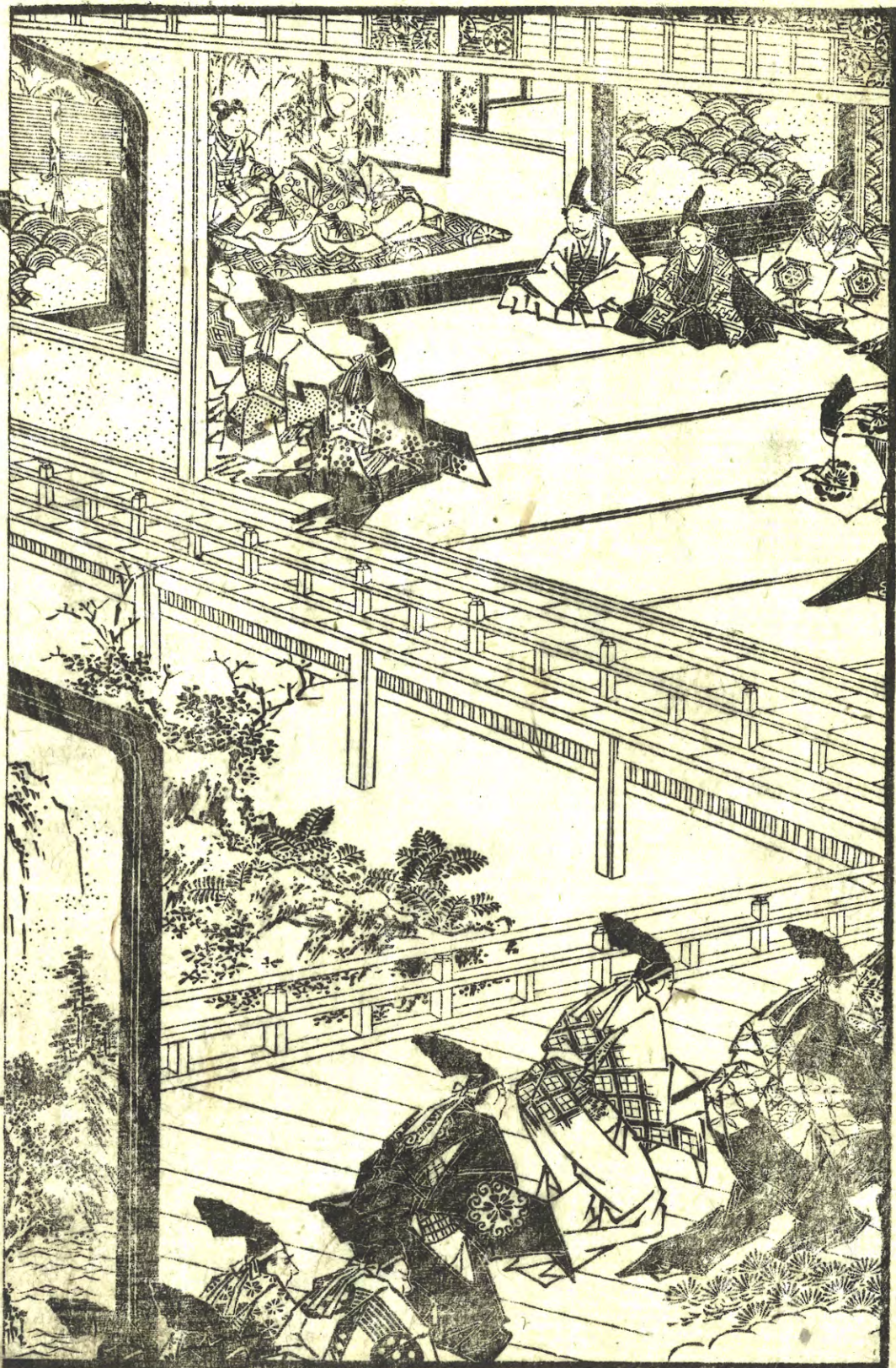
域イキナ 昉ハジル 於コニ 此

源賴朝者幼嘗險難一旦崛起東州奉
後白河上皇旨乃遣軍卒踣義仲鐵平家
且自征東奥殞泰衡首上皇大嘉之
以

頼朝聰明なりともさうめいなりて天下てんかの礼れいと義ぎ也。武家の棟梁とうりやうと作さるる人ひとと。古今ここん不韋ふゑ戒かいまといふ。



鎌倉殿
天下
一統の図



す。是れ。後世。傳ふ。知の。言行。その。実。と。得ざる。もの。あり。右。小。左。の。人。の。う。及
ぶ。所。小。の。後。尊。信。と。可。あ。る。但。其。の。史。と。續。り。具。眼。と。以。て。其。人。の。善。惡。邪。正
と。識。と。要。と。以。善。と。以。て。内。小。顧。と。是。と。祖。傳。せ。ん。と。思。ひ。惡。と。以。て。内。小。顧。と。其
道。と。改。む。と。こ。と。受。向。の。功。と。以。脱。小。孔。夫。子。の。宣。ひ。を。や。又。行。へ。必。く。所。あり。その
善。と。擇。ん。で。こ。と。小。從。ひ。その。善。さ。る。い。と。と。改。む。と。され。ば。只。管。興。る。者。と。優。て。亡。ぶ
者。と。數。も。あ。る。か。の。法。丈。夫。の。類。ひ。あり。故。小。顧。朝。國。家。不。能。で。大。功。を。双。の。良。なる。と
も。還。も。す。る。處。あり。その。二。と。編。り。ひ。て。童。蒙。の。惑。ひ。と。開。き。法。學。の。使。と。す。抑。顧。朝
父。と。俱。不。軍。敗。と。た。洛。と。奔。と。敵。の。為。小。虜。と。せ。る。と。朝。敵。の。子。ある。小。因。て。失。あ。へ。と
ん。と。と。り。と。池。禪。尼。が。請。小。免。下。作。皇。の。國。の。流。さ。る。一。人。実。小。僥。倖。の。基。と。こ。と。さ。る。苦
小。寢。塊。と。枕。と。俱。小。天。と。載。と。る。父。兄。の。讎。と。對。て。滅。却。せ。る。家。と。再。び。興。ま。さ。る。実
小。の。身。の。任。あ。る。と。に。忘。さ。る。ひ。一。人。顧。親。が。女。兒。辰。娘。と。密。小。通。と。て。さ。る。處。以。顧

親。系。より。傳。り。來。り。平。家。の。聽。と。憚。と。て。孩。兒。と。殺。し。顧。朝。と。も。國。ら。ん。と。做。し。ける
と。作。東。祐。清。情。こ。る。顧。朝。小。告。て。奔。ら。せ。り。夫。より。顧。朝。北。條。小。到。り。か。の。家。小。客。と
る。時。又。其。女。兒。辰。娘。と。通。と。時。政。と。知。る。と。い。こ。も。思。ふ。有。あ。ま。ば。取。て。待。と。因。て。志
と。る。の。後。政。子。小。中。臺。と。あ。る。と。と。得。る。顧。朝。祐。親。と。惡。の。條。捕。と。是。と。林。小。顧。一。祐
清。と。賞。せ。ん。と。以。祐。清。釋。と。せ。り。吾。父。罪。と。君。小。獲。と。擒。小。就。の。初。争。う。ふ。と。賜。と。受
ん。と。固。く。釋。と。徒。に。壽。永。元。年。二。月。小。至。り。二。浦。義。澄。縁。者。と。は。より。祐。親。と。命。と。を。顧
朝。祐。親。と。怒。解。と。是。と。省。人。と。あ。り。け。る。小。祐。親。と。て。あ。り。我。君。と。讐。言。と。せ。り。今。恩。と。を。以
と。こ。も。其。前。行。と。愧。と。と。終。小。自。殺。と。失。に。り。顧。朝。再。び。其。子。ある。九。郎。祐。清。小。報。謝
せ。ん。と。以。祐。清。肯。て。着。し。が。父。脱。小。自。盡。せ。り。何。の。面。目。あ。つ。て。世。小。多。ん。や。迷。小。我。と。又。と。顧。に
請。て。止。ま。さ。る。是。れ。源。と。こ。と。保。す。と。父。子。世。人。は。是。と。何。と。評。と。と。ま。試。と。小。是。と。論。ぜ。ど
柳。小。の。小。似。と。り。と。い。こ。も。天。下。國。家。と。治。る。人。更。く。如。く。あ。る。と。一。の。不。美。と。行。ひ。一。の

不幸に幾も天下を傳ふとも為らば、千石不易の誓言を祐親已小雙言ふ事あり。其本を推したる累代平氏の家人として源家の流人女兒と婚し、子を産むに至り、いんて争そのまにあらざる。備そでも思ふる。六頼朝小とよれ人あり。若小貳心あり。奸臣の時政もまた平氏ので舊婚の縁ありとのやと申す。傳ふに、頼朝平直吉の女を娶。頼朝の頼より、當時平相国の屋敷あり。其女と必す頼朝小聴も其表裏及腹なる。評と候むと明の宜ある。後平小至室家の権と奪人爲君といひ、且外縁ある。頼家と候。頼より我に。公曉がもて假て実朝と載し、天下を篡奪するに至り。頼朝是を察せ、其忠不忠を堅き。已小雙言する者、若て謀に名義明といふもや。又公經と退。討する。実小嫌疑の所爲ある。義経西及大功を顯り、自ら討つ。諸士を挫んぞ。是邊ありといふ。ども。若幸の勇將あり。首計の失あり。人々頼朝とて傳え。或は千葉三浦の如き、南功の臣とて、その近て謀する。然るも、自身教戒の書と

頼朝とて、二禁め、義経元来利発あり。奚ぞ改めざる。頼朝小及む。びと。只官位者。の初と信。その大功と空をうて。豫念中へ入らざる。腰城を遂かへ。後法皇功を賞し。内。の昇殿と聽さす。つ。左衛門尉小仕さる。及び兄と閑て私と。大不怒。つ。是と責め。土佐坊。冒倭とて夜討せむ。義経脱小間者といふ。と。豫念の動靜と知。ま。冒倭と雖小拒き。結向とて。死清と書し。悔多如く。以て夜討と訪。准依とある。土佐坊。曾てと。知む。と。欺き。裸し。と。心小勇。そ。堀川。ある。義経の弟へ。押寄。る。兼て。准依。の。と。ま。バ。義経。些。も。誤。ど。辨。慶。以下。の。勇。卒。と。て。勿。地。に。お。摧。き。後。に。土佐坊。と。謀。し。り。頼朝。と。て。大。小。飲。び。我。使。と。謀。し。ま。は。義経。と。伐。小。名。あり。と。それ。も。よ。く。せ。い。あ。め。と。つ。き。え。ん。や。う。夫。より。諸。小。の。物。と。集。自。ら。二。軍。小。ね。と。て。豫。念。と。進。軍。せ。り。が。義経。花。治。と。落。し。と。て。黄瀬川。より。門。返。し。梶。原。景。時。と。花。治。小。遣。し。義経。行家。が。餘。黨。と。謀。さ。す。ま。よ。り。爲。義経。に。急。に。迫。る。と。詮。方。あり。直。小。朝。教。ふ。と。思。ひ。推。て。頼朝。退。討。の。院。宣。と。請。

1453

三

泰衡也欺きて是を殺さず。後小澤春の罪と責て泰衡が一家を殲し其領地を没
収する。孟子は所謂人の肉を食するの殊處を論ずるに評して云く。頼朝口有
蜜腹有劍而忍人也。其功大於清盛其罪亦大。清盛庸義仲之惡懲平族之
暴者其非功之首乎。然陽尊天子無拱恭已而躬提挈綱紀節制天下久假不
歸惡知非其有也。自是朝廷零落王道如土可謂罪之鮮也。此忍一也。範頼惘
而無害何爲放之。此其忍二也。義經勇敢有蓋世之功何爲錮之。欺泰衡
以殺義經既而滅泰衡何爲食言哉。此其忍三也。閑景時潛想以屢辱功
臣何不察之。此其忍四也。廣常者創業之勲臣而殺之何罪有焉。其忍五也。
行家其叔父也全成者其弟也不授封邑不如恩顧其以含怒至於死。此其
忍六也。忠頼者甲陽藩鎮義定者遠州之干城共是同姓之親也有功無
罪或忌其勇殺之或殺其子而使懷怨自反也是忍七也。斯七者皆忍之大者

也。唯此心上之忍雖使頼朝能除其荊榛安其身又所以自鍛其羽翼絕其
種也。此條者雖爲婚家元是異姓之姦也。堪笑頼朝不知親親也以薄其所
厚而厚其所薄也。此條能安忍之意以立其私家猶三卿之於晋三家於
魯田氏之於齊也。頼家之愚實朝之柔寄意於歌鞠以不悟之手悟而勢
不足乎修禪寺之暴卒。鶴岡宮之刺客誰人爲之。此條之意者路人所知
也。虎兇出於押龜玉毀於櫃中其罪雖贖何免哉。所謂入我室操我戈以伐
我者欽。曾子曰出乎爾者反乎爾者也。非頼朝之謂乎。可不戒乎と云え。
實小確福といふ。竊小軍紀野史等と按ずるに多く減る者と賤し。興る者を称
譽するは是等の書の文法あり。故に童蒙復るに精をうせむ。唯その條とて讀と
して法に履殿とす。尋で言行の則とすなり。こふ於て勳もまた好める所小確はそ
倭に陷る奸に陷る。其條の勇と潔と。思慮深きと比喩と。こふの類いひするを

とせん。試みそを辨むに。源家子孫を基より。源家朝臣に至るまで。はるかに神
 の器備せしめて。朝家の田種をけしむ。新羅之部長光の甥を。後忠を偏執に
 因て。愛作誅し。且見公加賀次郎の所持。ある浅緑の太刀。その場へ捨つる。公
 猶も為る。その故に。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 頃地へ引籠りけし。その罪給を。とんと。為る。甲斐の城を圍む。後忠の
 子孫。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 結の慣ひ。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 う。忽ち敗亡する。に因て。為る。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 朝が。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 倫の。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 の。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。

際。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 源太義平。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 最。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 史。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 文。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 陸。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 校。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 ぞ。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。
 い。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。後忠を誅す。とんと。

氏いまだに異なり。條元のれ小清盛の叙平馬助忠正で勅命によりて清盛誅せし其
餘前後に一族と誅するところまで。東師と落て西海へ漂ふ時、君臣上下より其心と
一なり。叛き慍ふ者もあつた。いふ、敗績をい及び親族悉く海に没せし地、利久
の和おるべしと亞磨の令言ありといふ。人知ても猶滅ぶ現に積悪の餘殃といふん
手。かくて洋海の強暴とて大不悟の修る其惡を算するとも。後朝父と殺する罪責
いふ人寡きものなり。故に惡といふとも大不厚薄。さすまの差別あり。よく堅きより、悟
て明かにせむんばあべうび史で讀者の緊要に国史界清盛薨るの條に云。夫公恣
朝權幽。法皇千古之大罪而其志不在篡奪。雖謂不知君臣之名義要之
白河帝庶子得縱權勢耳。朝憲紊亂非出他家也。余每言公暴行猶驕子
置母而已云々と云えて。乃論最綱とあり。看る人深く味はる。乃得失を攷ふべし

日本百將傳一夕話卷之六 終



取 削

東肥熊本縣熊本市

金川店用物